

ずいそう

東京土木遺産ウォーク

村上 誠



東京ミッドタウン、新丸ビル、ザ・ペニンシュラ東京などなど、あらゆる所で再開発が進み見る見る変化していく東京……大人の遠足、近代土木遺産ウォーク（関西版）を読んで以来密かに目論んでいたそんな東京の土木文化遺産巡りを実行に移すことにした。

3月某日、朝、晴天。久々に家族を誘って自宅を出発した。東京の下町を流れる隅田川に架かる歴史ある橋の数々を見てまわろう、という魂胆である。

隅田川は元々入間川の下流部で荒川の本流だったが、洪水を防ぐために明治末期から昭和初期にかけて造られた荒川放水路が1965年の政令によって荒川の本流となり、分岐点である「岩淵水門」（東京都北区）より下流の荒川が隅田川と改称されたという。

因みに、延長23キロメートルの隅田川に架かっている道路橋は最上流の新神谷橋から最下流の勝鬨橋まで派川・晴海運河の相生橋を含め26あるが、その多くは1923年（大正12年）9月1日の関東大震災以降に復興事業として再建造されている。

今回のスタート地点は日本橋川（神田川の分流で隅田川に合流する）に架かる日本橋。欄干中央部に埋め込んである日本国道路元標は東海道（国道1号線）を始めとして7つの国道がこの元標を基点としており、

その同じ場所を出発地点として選んだものである。

近くに日本銀行や三井本館等の歴史的建造物を控えた日本橋を出発。普段何気なく渡っている第19代日本橋は1911年（明治44年）に建造された石造2連アーチ橋で、欄干両端の獅子像と中央の麒麟像のモニュメントが素晴らしい。生家が近いことから長い間付近を歩いていながら今になっての新たな発見である。

上を通る首都高速道路を地下に移し、景観を少しでも復活させようという動きがあるという。たとえ実現したとしても、橋の上から富士山を遠くに望むことは出来ない。

京橋方面に歩き旧白木屋デパートの角を左折、都営地下鉄日本橋駅へ。その地下鉄を利用して東銀座駅下車。晴海通りは休日の朝ということもあって人も車も少なく何となく落ち着いた気分を味わう。

築地場外市場を右に見て20分ほどで勝鬨橋に到着。このわが国初の二葉の跳開可動橋は1940年（昭和15年）の幻に終わった国際博覧会用につくられたもので、1970年（昭和45年）を最後に跳開されることはなく現在は電気も切られている。もう一度、跳開した勇姿を見てみたいものだ。

勝鬨橋をあとに築地、新橋を通過して第一京浜国道を品川方面に向かう。芝大門の交差点を左折、浜松町駅を過ぎ徒歩約1時間で日の出棧橋に到着。今回は初のトライということで多少楽をして水上バスで川面から



執筆 村上 誠



日本橋 麒麟



吾妻橋



美しい清洲橋



新大橋

の視点から隅田川の橋を観察するのだ。

船が出て間もなく先程の勝鬨橋が近付いてくる。悠然とした姿は下からの景観も素晴らしい。

勝鬨橋のあとは佃大橋，中央大橋，永代橋，隅田川大橋，ケルンの大吊橋を手本に1928年（昭和3年）に完成した清洲橋，新大橋，江戸時代に武蔵，下総の2国を結ぶ橋として架けられ現在の橋は1932年（昭和7年）に架け替えられた両国橋，蔵前橋，厩橋，駒形橋，吾妻橋，言問橋と続き，Uターンして吾妻橋際の船着場，浅草に到着して下船。

40分の船旅を楽しんだ。

端正なアーチ橋の吾妻橋はもともと隅田川の別名・

大川橋と呼んでいたが明治時代に今の名称に変わったもので，赤い色は浅草寺の伽藍に因んだものという。

吾妻橋からデンキブランで有名な神谷バーを横目に雷門へ。喧騒の中に浅草ならではの懐かしい下町情緒を感じながら仲見世を通して浅草寺でお参りを済ますと，駒形橋袂の「駒形どぜう」でやっと遅い昼食にありつき，今回の全行程を終了した。

次は何処にしようか。考えるだけで楽しい気分になる今日この頃である。

—むらかみ まこと 新キャタピラー三菱株式会社 直販部長—